

# 昔と今をオーバーラップ

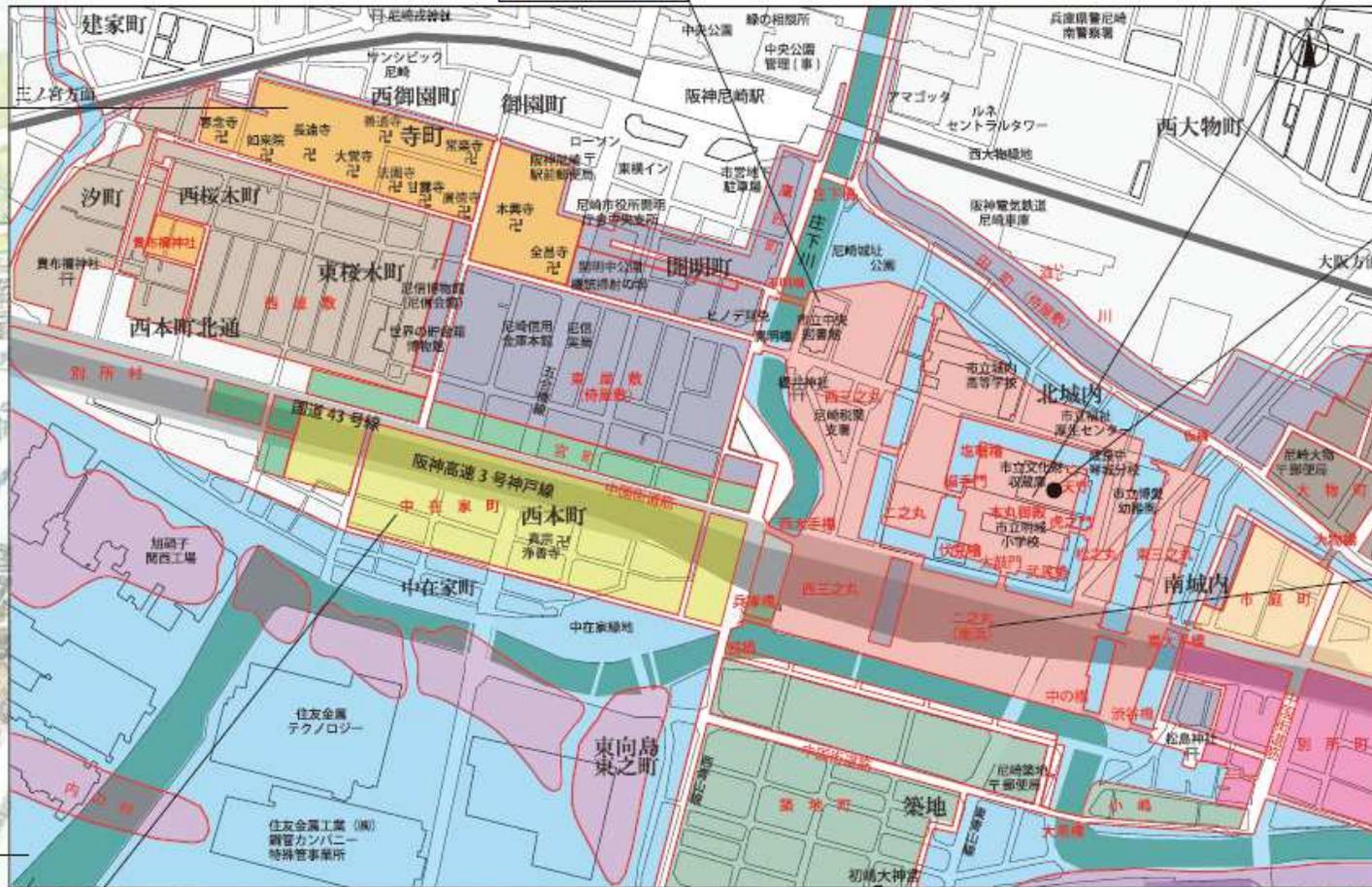
## 城下町と寺町



天正18年(1590)、豊臣秀吉が京都の東の京極に寺町を作ったことをきっかけに、全国の城下町に数多くの寺町が建設されました。尼崎の寺町もその一つで、尼崎城築城の際に寺院が一箇所に集められました。また城下町の前後部分を軍事的に固めるためにも利用され、大きな建物と境内は出城の役割を担いました。明治以降、都市化により昔の面影を失っていく中で、約400年間の歴史の区画も当初のまま残されている尼崎の寺町は、今日において貴重な存在であり、多くの文化的遺産、歴史的資料が残っています。

↑江戸時代当時の海・川・堀  
 □赤字・赤枠=江戸時代(エリア・地名・建物等)

↑現在の川  
 □黒字・黒枠=現在(エリア・地名・建物等)



## 尼崎城

尼崎城は、二重・三重の堀で全体を楕円状に構成しており、本丸には枡形虎口が設けられ防備の固さがうかがえます(裏表紙の絵を参照)。この設計は、江戸城や二条城・名古屋城に似ており、平地に築かれた典型的な近世城郭の構造で、江戸幕府の城としての特徴が表れています。また、水を巧みに利用した姿は、水に浮いているように見えることから「浮城、海城」と呼ばれたほか、「海城」という別称もありました。

←当時を模して造られた城壁(現尼崎城址公園)

## 本丸(ほんまる)

### 本丸御殿(ほんまるごてん)

本丸は、約120m四方の形で、城内の中心を占めています。本丸御殿は城主(藩主)の住居であり、同時に藩の政務や重要な儀式をとり行う場所でもありました。

## 天守(てんしゆ)

本丸の東北隅に東西約18m、南北14mの天守台があり、その上に高さ約11mにおよぶ、四重の天守がそびえていました。(表紙絵参照)



尼崎城天守閣遺跡(文化財保護事業時)

## 三重櫓(さんじゅうやぐら)

本丸には東北隅の天守を除く3隅に三重の櫓があり、それぞれ数兵衛(南)、伏見櫓(海城)(西)、松之丸櫓(北)と呼んでいました。

## 三方の門

東: 虎之門(とらのもん)  
 南: 太鼓門(たいこもん)  
 西: 櫓手門(からめてもん)

## 二之丸

二之丸御殿を始め、米を貯蔵する御城米蔵、駐立ちばんでいました。

## 南浜

南浜には家老屋敷が並び、松平氏時代には五軒並んでいたことから、南浜御代は五軒町と呼ばれていました。

## 松之丸

虎之門で本丸とつながり、騎槍や弓の練習をする御槍、火薬を貯蔵する御硝薬などがありました。

## 西三之丸

南浜と地続きで、二之丸とは土構門でつながり上級家臣の屋敷や遊覧の松原などが併んでいました。

## 東三之丸

東三之丸には、家老クラスの上級家臣の屋敷が並んでいました。北にはある坂門から対岸の侍屋敷である田町に坂橋がかかれ、東大手橋から続く大道が中国街道に繋がっていました。

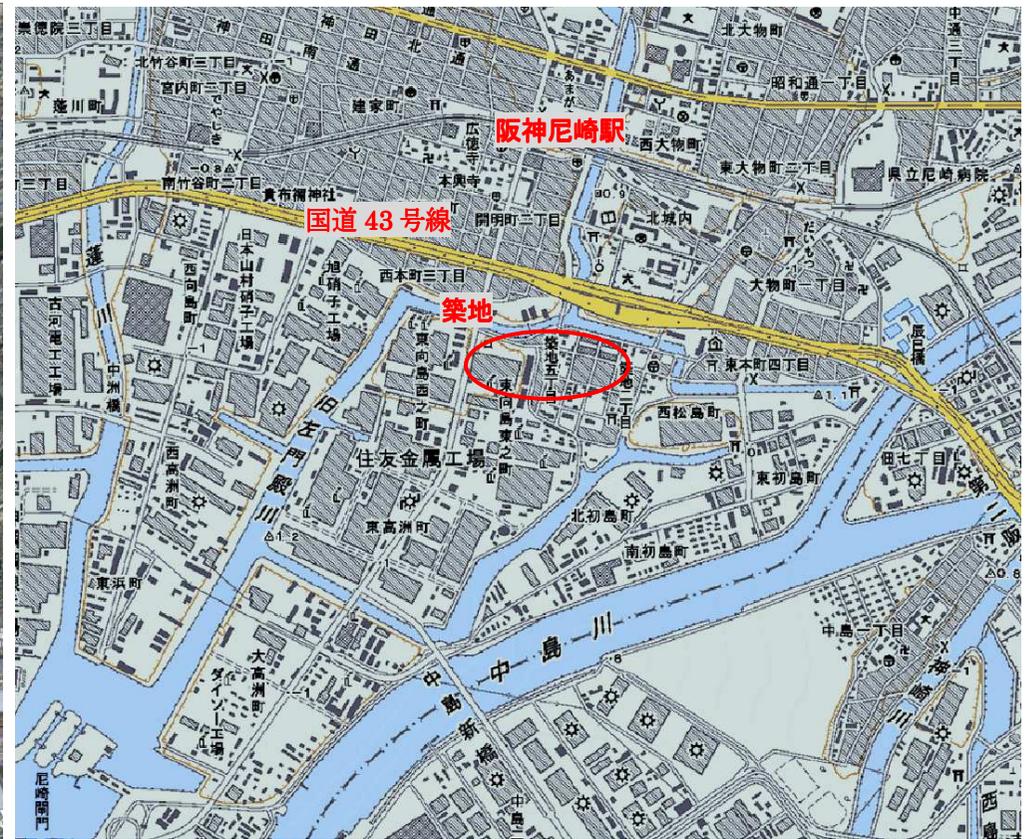
## 城下中在家町(じょうかなかざいけちよう)

中在家町は、江戸時代初めの尼崎城築城にともない、寺町とともに城の西方に新しい町として作られました。尼崎は古くから漁業が盛んであり、江戸時代に入って解作用肥料の干鰯の需要が増えると、イワシを求めて関東地方にまで出漁。そのため海に面した中在家町には生魚問屋をはじめ漁業関係の商人や漁師が多く居住し、城下では最も人口の多い町でした。また、同町には魚市場があり、従の水風と呼ばれる南側の水路を通り、魚が近海や西国各地から入荷するとともに、城下や京都・大阪方面に売りさばっていました。

## 浦の初島/初嶋大神宮(はつしまだいじんぐう)



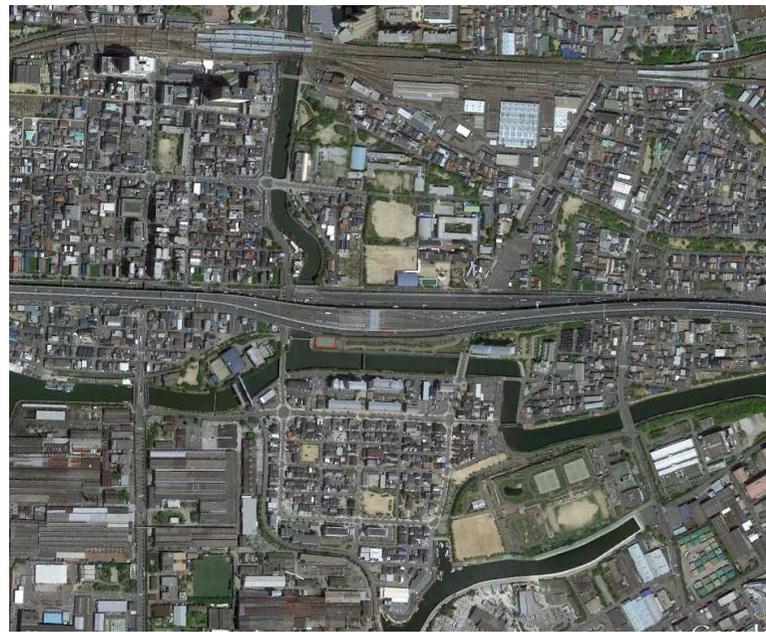
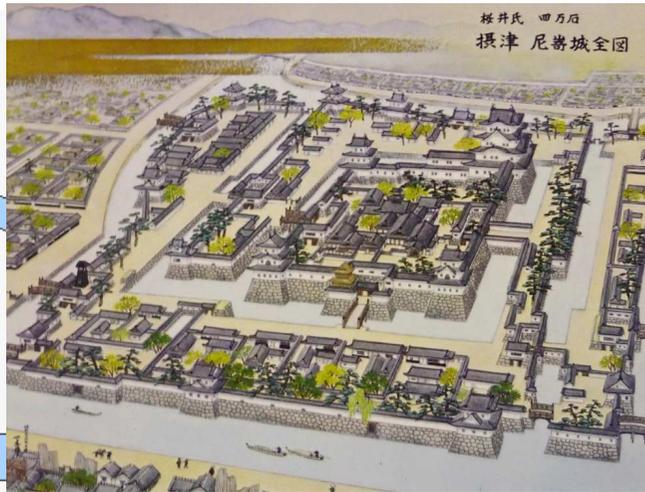
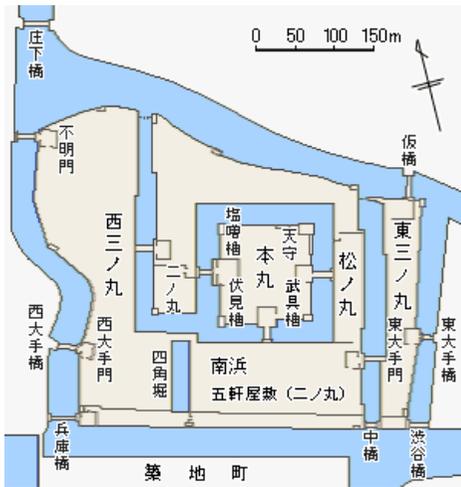
江戸時代以前、静かな海原に浮かぶ小舟、点在する幾多の島々、白砂につらなる青松などから根津の松島と称されました。この豊饒の地を多くの歌人達は「歌枕浦の初島」と呼び、しげくこの地を往来したと言われています。初嶋大神宮には至徳5年(1755)に、「古歌もあまたあれど、今またあらたに浦の初島と題してと、京都の公卿8人に歌を所望する」とあり、現在8種の歌が詠われています。



江戸初期 尼崎城下町図



西の守りの要 城から直接海へ出られた水城 3重の堀と4層の天守閣を持つ尼崎城



現在の地図に重ねた尼崎城と城下 築地の街